

いろいろなヒト・モノ・コトを繋げるー

『喫茶とお宿とよはく。

わきみち』な暮らし

～ オーナー 太田清美さんに聞く ～



名古屋から移住、地域おこし協力隊としてコロナ禍を含め4年活動、卒業後にゲストハウスを開業した太田清美さん。彼女が手がける「喫茶とお宿とよはく。わきみち」は、箕輪町に根差し、訪れる人々に温かな歓迎を提供する場となっています。太田さんがどのようにしてこの事業を立ち上げ、またどのような思いで日々運営をしているのかについてお話を伺いました。

上高地での経験が生んだおもてなしの心

Q: 長野県への移住を決めたきっかけと、地域おこし協力隊へと繋がる経緯を教えてください。

太田さん(以下、太田): 上高地でアルバイトをしていたときに見た自然が衝撃でした。「なんてきれいな水なんだろう。この水が海に流れていく間に汚れてしまうのが悲しい」と感じ、そのとき、この水を蓄えている山の偉大さに気づいたんです。この経験から、森ともっと身近に接し、「自分と森の関係を考えてみたい!」という気持ちが強まりました。そして、名古屋で移住相談をしていた、長野県名古屋移住・交流サポートデスクで箕輪町の交流菜園のことを知って通うことを決めたことがきっかけなんです。『移住するする詐欺』で笑。長野が大好きで移住を計画してからが長かったです。箕輪町へ



の決め手は名古屋から通えるところと、交流菜園の内容と料金の良さです。野菜作りとともに出会った方々との交流も想像以上に楽しく通っていました。二年が経ちそろそろ本気で移住を検討、松本や安曇野にも足を延ばし積極的に物件を探していました。そして、箕輪町のゲストハウス「ロングヒルズ」に宿泊。「交流菜園が近くて」「大好きな仙丈ヶ岳が見えるところ」と「ながたの湯が近くにあるところ」。箕輪町でこの全ての要件を満たした物件にたまたま出会ったんです。そしてほどなく移住。その頃、ロングヒルズの先輩移住者の店主さんから「箕輪町で地域おこし協力隊の募集があるよ」と教えてもらい、その時のミッション

が「関係人口の発展」。それまで、箕輪町の関係人口として活動していた私の人生のテーマは人との「繋がり」、そして「繋ぐ人」。「私も繋ぐことが出来る!」と思い応募したんです。なので、地域おこし協力隊に決まったから移住したのではなくもともとは移住を決めたのが先だったんですよ。住民票はまだ移してなかったですからね(笑)

移住、そして地域とのつながり

Q: 移住後の生活はいかがでしたか？

太田: 元々名古屋では福祉関係の仕事に携わっていたこともあり、自然と社会が繋がる機会を作りたい、多様性を認め合える社会になったらいいなあ、いろんな人が居て面白い社会になるといいなあと思って、つながり作りの活動をして



たんです。福祉に限らず、例えば、地方と名古屋。自然と人。農と人。素材や廃材を活かしたアップサイクルなこともしていきたいなと思っていました。

コロナ禍となり、4月1日から協力隊員になる直前に、いきなり緊急事態宣言が発表。地域おこし協力隊としての活動が全くなかったんです。しかし、家にこもってばかりもいられないのでその時間を利用して町内を隅から隅まで周ったり、オンラインで他の町の地域おこし協力隊の人たちとの交流や、町役場に毎日のように通って箕輪町のことをたくさん知る活動をしてたんです。

Q: ゲストハウスを開業しようと思ったきっかけを教えてください。

太田: 自分が暮らしながら、家を開く、住み開き出来る家を探していました。知り合いからの紹介で出会ったこの家は、もともとストレッチ教室をやっていたところで、人の出入りが多いと聞き、私が目指す人の集まる場所としていいなと思ったんですね。お部屋もたくさんあったので、宿にして、そこで運営費をつくることができなにか、と考えました。ただ、これからのことをどうやって進めていけばよいかかわからず、途方に暮れていたことがありました。皆さんに相談する日々が続き、そうして信頼できる大工さんとの出会いが人生が大きく一転、多くの人のおかげによりそこから一気に開業に向けてスタートすることになったんです。大工さんに相談して入り口を広げたり、トイレにはたくさん手すりを設けました。「おもてなし」を大切にしながら、どのような方でも利用できる空間作りを心掛けました。おかげさまで、今では多くの県外の方々や海外からのお客様にもご利用いただき、週末は予約が埋まるほどになりました。私は宿を経営しながら地域の皆様との交流を大切に、地元の方々とも一緒に活動できることをありがたく思っています。

Q 今まで辛かったこと、がんばったことはどのようなことですか？

太田: 旅館業と共に飲食業を始めると決めてからはその段取りで頭がいっぱいでした。中でも大変だったのは、事業を始めるためのいくつかの許可を取ることでした。皆さんが楽しみにしてくれているのに、中々進まないことに対する申し訳なさがありました。毎日が追い込まれていました。「許可が下りないんじゃないか」「オープンに間に合わないんじゃないか」「いや、こんなに多くの方々の助けを得てきたのに、とにかくやらなきゃ！」と、ポジティブになったりネガティブになったり。好きな自然を楽しむ余裕もなくとても苦しいときでした。が、それらを乗り越えられたことは、関わっ



て下さった多くの皆様おかげでありとても感謝しています。ゲストハウスを開業したことで、ただ宿泊を提供するだけでなく、地域に根ざしたイベントや交流の場を作ることができたことは大きな喜びです。例えば、同じ思いを持つ仲間と一緒に森でのワークショップやイベントを企画したりできます。仲間たちとの出会いはここでの大きな一歩になりました。

「よはく」の名前に込めた思い

Q:「喫茶とお宿とよはく。わきみち」の名前にはどのような意味が込められていますか？

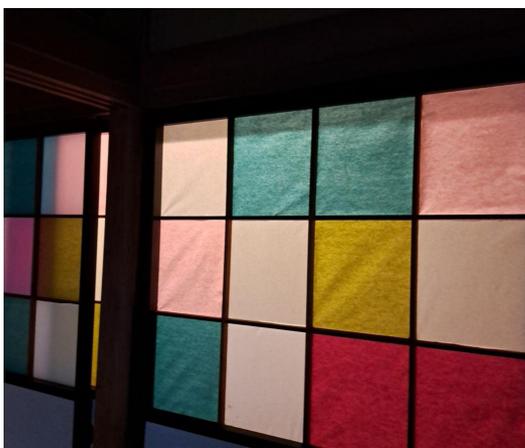
太田:「よはく」という言葉には、「特に意味を固定しない」という意味を込めたんです。変化し続け、どんな形にもなれる場であるという思いです。「わきみち」という名前は、私自身が王道を歩んできたわけではなく、むしろ脇道を進んできた部分があるので、「そうした道を進んでもいいんだよ」というメッセージを込めています。



Q: ゲストハウス以外にも地域活動に力を入れていると聞きましたが、どんな活動をされていますか？

太田: 地域の方々や子どもたちに気軽に来てほしいという思いから、地域活動にも積極的に参加していきたいです。先日、町内駅伝大会で私、区域の代表で走ったんです。そのほか、区のそば打ちの会にも参加しています。もちろん、そのあとの宴会にも。これらの活動を通じて、地域との絆を深めることができたことは、とても貴重な経験となっています。また、私はサイクリングガイドの養成講座を受けてガイドをやっています。ゲストハウスでは自転車の貸し出しも行っています。修理道具も一式あるんですよ。私は修理できないんですけどね(笑)

将来的な展望と夢

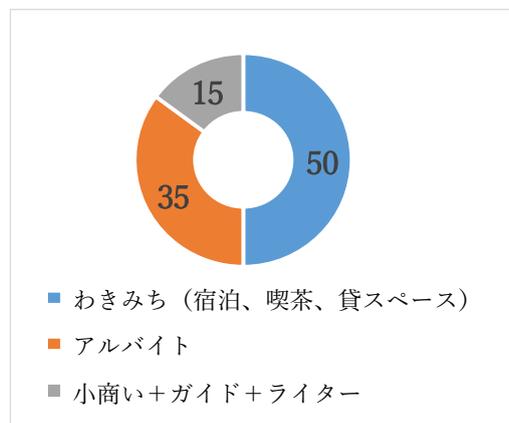


Q: 今後の展望についてお聞かせください。

太田: 現在のゲストハウスのスペースには、まだ使っていない部屋があって、一つはギャラリーの予定。もう一つは将来的にはこの部屋に本棚を作り、図書スペースにしたいというプランを計画しています。地域の方々や宿泊者が自由に行き来し、本を読んだり、お茶を飲みながらリラックスできる空間……。ここが、ただの宿泊施設ではなく、地域の人々や子供たちが集まり、遊びの体験や情報を交換できるコミュニティの場であつたらいいなと思っています。モーニングサービスもやっているのですが、それは

名古屋の愛すべき文化【モーニング = コミュニティ】という感覚が私の中に流れてるからですね(笑) また、今後はさらに地域資源を活かし様々な体験型プログラムやイベントを展開して、地域の人も自分も楽しくなる(豊かになる)ような活動をしていきたいですね。

私の現在の収入の内訳は、50・35・15(%)くらいです。働き方としては、一つに固定したくなくて常に複数です。いろいろなところに繋がりを持っていたいんですね。お宿(わきみち)は、宿泊だけでなく貸しスペース(シェアキッチン等)としても活用できます。宿泊の団体客の急なキャンセルがあったらもう本当に大変で。そんなリスクを回避するためにも複数からの収入スタイルは今後も続けていきたいと思えます。ただ、メインは宿泊なので将来的に宿泊収入は70%に引き上げられたらいいなとは思っています。



まとめ

太田さんのビジョンは、地域の人々と自然とが調和する場所を作り出すことにあり、その温かな思いやりと穏やかな語り口からは、心の奥深くにある「人とのつながり」を何よりも大切にしている姿勢が感じられます。



決して華やかな成功を求めたわけではなく、「わきみち」を歩むように、柔軟で自分らしいペースで進んできました。地域の方々や訪れるお客様に温かい空間を提供する中で、「急がず、焦らず」と、穏やかな決意を持って歩みを進め、周囲と共に成長しています。店内外の至る所に太田さんの優しさと思いやりがあふれ、ぬくもりを感じる装飾からもその心が伝わってきます。『よはく』という名前に込めた思いには、自身の人生観が色濃く反映されており、「固定せず、自由に変化できる」ように、訪れる人々に自由で柔軟な生き方を示しています。「わき道」は、単なる宿泊施設に留まらず、地域とともに成長する「コミュニティを育む場所」としての新たな役割を担っています。

お客様一人ひとりを大切に、地域との絆を深め、未来に向けて着実に歩み続けている、太田さんの「優しさ」、「穏やかさ」、そして「決して妥協しない強さ」が、これからの「わきみち」にさらに多くの人々を引き寄せ、温かいコミュニティが広がっていくことを予感させます。彼女はこれからも多くの人々とともに、自然を愛し、自然の中に溶け込んだ人生を楽しんで輝き続けることでしょう。

- ・取材 : 平賀裕子・千田るみ子
- ・構成・執筆 : 千田るみ子
- ・ご協力 : 太田清美

【太田清美さんプロフィール】

名古屋生まれ・名古屋育ち。信州が好き過ぎて長野県箕輪町に移住。2020年4月から、箕輪町の地域おこし協力隊として新たな暮らしをスタートさせる。自然・鉄道・日本文化が好き。福祉施設スタッフ・OL・販売員・上高地でのホテルスタッフ、カフェ店員などを経験。と同時に、商品やアートを通じて障害のある方たちと社会が繋がる機会を作りたいとの思いでアトリエ活動や商品開発・販売、社会への発信、様々な福祉施設やクリエイターとのつながり作りを経験する。多様性を認め合える社会作り、「常に複業」が私流。社会福祉士。